

# 柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第199号

古老は語る

宮野薫さんのお話 6

## 岡上の人々と戦争（その6）

（聞き手、筆録、コメント＝小関 和弘(柿生郷土史料館専門委員)）

\* 「敵は幾万」「勝って来るぞと」を歌って柿生駅まで出征兵士を見送った。部落によっては楽隊を持っていて、その賑やかな音に送られて出征していった。

・飯塚重信氏『柿生村と私のあゆみ』（柿生昭和会、1979年）には「出征兵士ののぼり旗（略）をひらめかせながら、先頭に立っては村の青年団などの鼓笛隊がその列に続いた」（p.229）との“兵隊送り”の描写があり、併せて大太鼓・小太鼓・ラッパを装着し国民服姿で整列した人々の写真も掲載されている。「鼓笛隊」と言うより「喇叭鼓隊」である。説明文には「上麻生の人たち」とある。飯塚氏は「万歳三唱……日の丸の小旗に送られての出征兵士の気持は如何なものだったろうか」と戦地に向かう兵士の辛い心中に思いを寄せている。



整列した喇叭鼓隊（飯塚重信『柿生村と私のあゆみ』より）

\*（町田でだったと思うが）流行歌の「明日はお立ちか」を歌って出征兵士を送り出している様子を見た。暴力団のような人たちがそれをしているのが、少し奇妙（滑稽）だった。

・小唄勝太郎の「明日はお立ちか」（佐伯孝夫作詞、佐々木俊一作曲）は1942（昭和17）年3月の発売。「明日はお立ちか お名残り惜しや／大和男児の 晴れの旅…」と歌い出され、3番は「晴れた夜空に 夫婦星」と歌い終わるのだった。

・出征兵士壮行歌としては1904（明治37）年7月発表の「天に代はりて 不義を討つ／忠勇無雙の わが兵は／…」と歌い出す「日本陸軍」（大和田建樹作詞、深沢登代吉作曲）があった。しかし歌詞が古めかしく、時代にそぐわないとされていた。また「勝って来るぞと 勇ましく／ちかつて故郷を 出たからは…」の「露営の歌」（藪内喜一郎作詞、古関裕而作曲）が1937（昭和12）年9月に発売されていたものの「あまりにも哀調の響きが強いとの理由でふさわしくないとされた」（小村公次氏『徹底検証 日本の軍歌』（学習の友社、2011年））。そうしたなか、出征兵士の壮行にふさわしい歌を、ということで大日本雄弁会講談社（現講談社）が39年7月に陸軍省と提携して歌詞の懸賞募集を行い、生田大三郎の「出征兵士を送る歌」を当選作とした。「わが大君に 召されたる／生命光榮ある 朝ぼらけ／讃えて送る 一億の／歓呼は高く 天を衝く／いざ征け つはもの／日本男児！」との歌詞で、講談社傘下のキングレコードは専属歌手を総動員してレコード化し、大ヒットに繋がった（塩沢実信氏『昭和の戦時歌謡物語』（展望社、2012年））。『昭和軍歌・軍国歌謡の歴史』（アルファベータブックス、2020年）で菊池清麿氏は、この歌が「勇ましく送る歓呼の歌声として定着」したが、「戦意高揚の裏」に「哀調と悲愴が主調低音として増幅されていた」としている。「一億の歓呼」や「天を衝く」といった誇張が覆い隠そうとするうそ寒さの指摘でもある。

「明日はお立ちか」は士気を鼓舞する軍歌よりもはるかに人と人とのあいだの情の深さに届く歌だったろう。

塩沢書には「しゃちこぼった公募歌がはばをきかしている中で、戦争末期に兵隊たちの厭戦気分をあおる“軍隊小唄”の元祖になる「ほんとにほんとに御苦労ね」が発売された」のが「明日はお立ちか」と同じ年だったとの指摘がある。

「ほんとにほんとに御苦労ね」（野村俊夫作詞、倉若晴生作曲）の1番は「楊柳芽をふく クリークで／泥にまみれた 軍服を／洗う姿の 夢を見た／お国のためとは 言ひながら／ほんとにほんとに ご苦労ね」である。「戦争小唄」の2番以降は各兵科で歌詞が多少異なるが、共通する1番は「いやじゃありませんか 軍隊は／カネのお椀に 竹のはし／仏さまでも あるまいに／一膳飯とは なさけなや」であった。官許の軍楽で鼓舞されようとも家族や「出征兵士の気持ち」（飯塚氏）は、これらの歌の方に近かっただろう。「暴力団のような人たち」はそうした気持ちを抱きつつ「明日はお立ちか」で仲間を送ったのかも知れない。（続く）

シリーズ  
禅寺丸柿の歴史 9

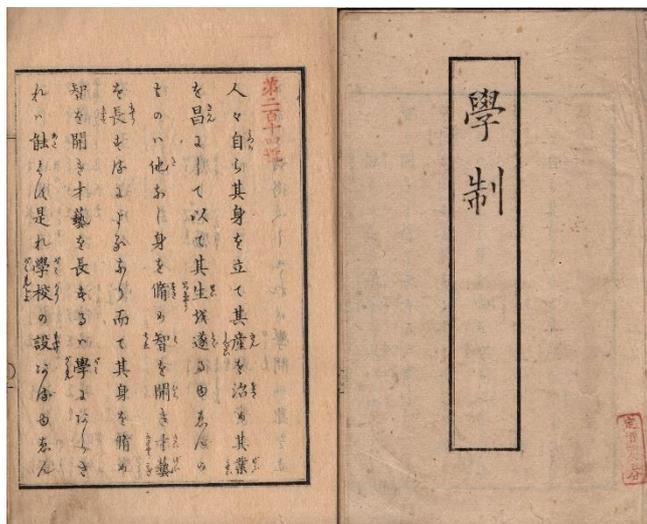
## 近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(9)

相澤雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

## 近代の教科書にみる物産・禅寺丸柿(1)

近代に入ると子どもたちの学びは、これまでの農業往来、百姓往来といった往来物などを使った「読み書き」の寺子屋教育から、西洋的仕組みや考え方を学ぶ近代教育へと大きく様変わりした。近代国家建設のために教育は、重要な役割を果たした。

そこで今回は、近代教育における地誌関係の教科書の項目のひとつ「物産」に着目してみた。その理由は、都筑郡の果樹として名高かった禅寺丸柿が、地誌関係の教科書で物産として取り上げられていた事実があったかどうかを探ってみることにあった。あったとすれば、近代教育の場で禅寺丸柿は、学童共通の知識として培われたことが裏付けられることとなる。すなわち近代教育の中で、禅寺丸柿は都筑郡を代表した物産として、受け入れられていた事実の有無を調べておく必要性を考えてみた。さらに学童に対して身近な「物産・禅寺丸柿」を学ばせることは、殖産興業の必要性を学童の頃から教え込んだ証左ともなる。



明治5年(1872)8月に発布された「学制」(部分)  
筆者蔵

近代教育の方針については、衆知の通り明治5年(1872)8月に文部省が「人々自ら其身を立て其産を治め其業を昌にして以て其生を遂るゆゑんのものハ他なし 身を修め智を開き才芸を長ずるによるなり(中略)、自今以後一般の人民華士族農工商及婦女子必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す(後略)」と定めた学制に述べられている。我が国の近代教育の始まりである。翌年2月に神奈川県は、「就学告諭文」と「神奈川県学制」を定めている。学区制により都筑郡は、高座郡と共に第1大区第9中学区に属した。都筑郡内には、下麻生、片平、岡登(岡上村)、奈良、恩田、寺家、鉄、谷本、石川などの各学舎が次々と創立した(『文部省第二年報』)。なお橘樹郡は、久良岐郡と共に第7中学区に属した。

近代の地誌関係の教科書から都筑郡の物産を探すための手がかりとして、最初に明治初期の都筑郡内の学舎には、どんな種類の教科書が備えられていたかを調べてみた。例えば、岡上村に設けられた岡登学舎(責任者は山田八重吉、教員1人、生徒数19人)には、農業往来・地方往来・世界商売往来・国史略・十八史略・窮理問答など24種類の書籍が備わっていた(『柿生の教育のあゆみ』)。岡上村の隣村である奈良学舎を見ると習字本・小学地球儀問答・世界商売往来・史畧・小学読本・地理初歩・日本地誌略・万国地誌略・日本政記・日本外史・日本物産字引など38種類の教科書が確認できる(『奈良学校点検表』)。これらの書籍を見ると学童が使うためと言うより、その内容からして教師用のものであったと考えられる。岡登学舎の備え付けの書籍からは、寺子屋時代の往来物や漢籍が引き継がれていた形跡がうかがい知れる。学舎発足当初には、往来物を使った寺子屋方式の授業が続いていたことが想像できる。このことを裏付ける記録がある。創立時の都筑郡内の学舎での授業の様子について、鶴見川中流域の吉田村(港北区新吉田町)の藤沢三郎が明治末年に編んだ『吉田誌』に「教場は最初の事とて旧の如く机を並べ座して習字読本を為せり」「旧習を懐しみ、進化を嫌う感情があり、学校令の命令が速やかに行われなかった。渋々かつての寺子屋を廃止して学校を設けた。」と、旧態依然とした寺子屋教育の延長であった様子がうかがい知れる。おそらく郡内の各学校の教育方法もおしなべて、似たりよったりの様相を呈していたものと考えられる。そうした中、県内各地で独自の地誌関係の教科書が次々と出版されていった。例えば明治8年刊の川井景一著『神奈川県地誌略』、同12年刊の小安鉦之助訓訳の『神奈川県管内地誌略字引』、同12年10月刊の神奈川県学務課編纂『神奈川県管内地誌略』などである。今回は、これらの教科書に記載された物産「柿」をみていくこととする。

(続く)

シリーズ  
歴史の中の女性像

その1 ナイチンゲールの世界 (16)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

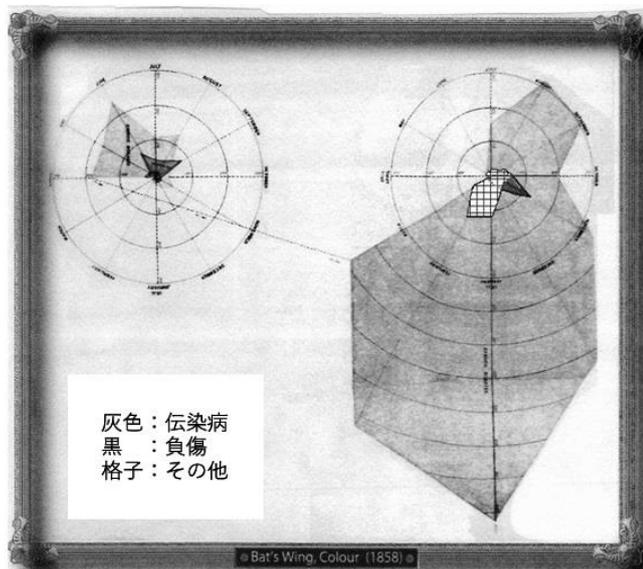
統計学者ミス・ナイチンゲールの誕生

前号に記した 1 千ページに及んだ報告書には、『国王陛下の命により組織された、陸軍の衛生状態、陸軍病院の組織、病人や怪我人の扱いに悪影響を及ぼす規制を調査するための委員会報告～証拠資料及び付録つき～』という長いタイトルがつけられていました。フローレンスは委員会のメンバーではなかったのですが、何度も委員会に呼ばれ、その都度現地の報告や記録した資料の提供など、委員会の活動に積極的に関与する機会は与えられていました。それどころか報告書には、実際にフローレンスが執筆した文章が含まれていました。現在明らかにされているのは、報告書の 361 ページ～394 ページの部分と 516 ページ～543 ページの部分の 2 か所です。

第1の部分は、戦地の状況をミス・ナイチンゲールが委員の質問に答える対話形式で書かれています。この部分は証拠資料の末尾に収められ、「委員によってミス・ナイチンゲールになされた文書による質問に対する回答」と名付けられた対話形式の文章になっています。質問は、クリミア戦争の従軍看護士監督官に就任するまでの経歴に始まり、次第に陸軍戦地病院の不衛生な環境の実際に迫っていく体裁がとられています。『報告書』の類は、史料館にも近隣の『〇〇遺跡発掘調査報告書』が何点も保存されていますが、いずれも専門用語がちりばめられたお堅い文章ばかりです。そうした長い文章の多い報告書の中で、対話形式の短い文章は、大変読みやすく読者に訴えかける力も大きかったです。

第2の部分、報告書の 516 ページ～543 ページの部分は、「付録第 72」というタイトルが付けられた 28 ページに及ぶ文章と表及びグラフからなっています。ケトレ統計学を学び、統計学の泰斗ファー博士の協力を得たフローレンスは、自ら考案して当時としては画期的なビジュアルなカラーグラフを何点も作成して、報告書に盛り込んだのです。当時の統計資料は表として示されることが殆どで、グラフは非常に稀だったのです。そんな時期に多忙なフローレンスが、グラフの作成を思い立ったのは、なんとヴィクトリア女王にお見せすることがきっかけでした。フローレンスからスクターリの病院での出来事を聞くことを好んだ女王は、何度も話を聞く中で、戦傷で亡くなる兵士よりも伝染性の疾患で亡くなる兵士の方が多いいことを、一目でわかるようにしてほしいと求めたのです。その希望を尤もと受け止めたフローレンスは、苦心の末に後に「蝙蝠の翼」と名付けられて有名になるカラーグラフを考案したのです。下に掲げた表とグラフをご覧ください。グラフをカラーで示せないのが残念ですが、1854年4月～56年3月までの2年間の、イギリス軍兵士の月別死亡数を死亡原因別に分類し、月ごとの駐屯兵士数を分母に各月の死亡率を原因別に色分けしてグラフ化しています。右のグラフの9時の位置が54年の4月を示し、時計回りに10時が5月、5時が12月、8時が55年3月となつて、左のグラフに移り、また同じように9時の位置が55年4月となり、56年3月までがグラフに収められたのです。グラフで戦病死を緑(灰色)、戦傷死を赤(黒)、その他を黒(格子)で示して、

西暦年	月	平均兵力	伝染病	負傷	その他
1854	4	8571	1	0	5
	5	23333	12	0	9
	6	28333	11	0	6
	7	28722	359	0	23
	8	30246	828	1	30
	9	30290	788	81	70
	10	30643	503	132	128
	11	29736	844	287	106
	12	32779	1725	114	131
1855	1	32393	2761	83	324
	2	30919	2120	42	361
	3	30107	1205	32	172
	4	32252	477	48	57
	5	35473	508	49	37
	6	38863	802	209	31
	7	42647	382	134	33
	8	44614	483	164	25
	9	47751	189	276	20
	10	46852	128	53	18
	11	37853	178	33	32
	12	43217	91	18	28
1856	1	44212	42	2	48
	2	43485	24	0	19
	3	46140	15	0	35



フローレンスが尊敬してやまない、統計学の先達あのケトレ博士にも激賞された彼女の統計学上の最初成果はこうして生まれたのです。(続く)

クリミア戦争派遣イギリス兵士の  
原因別志望者数

左の表を利用して派遣兵士の  
死亡率を原因別に示したグラフ

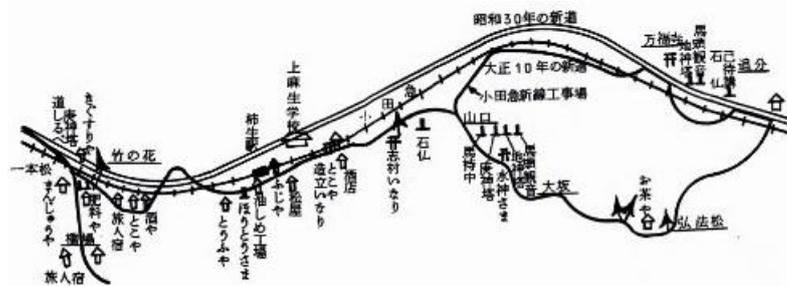
祝 川崎市制誕生百年

柿生の道 津久井道

柿生地域(旧柿生村)現在の柿生周辺には、何本もの道路が走っています。その上世田谷～町田線の4車線への拡幅工事や駅前東口の大掛かりな道路拡張工事も進行中です。おかげで柿生駅前から柿中への通学路も、ちょっとだけ近くなりました。

道(みち)っていつ頃からあったのでしょうか。高村光太郎は詩集『道程』の中で「僕の前に道はない 僕の後ろに道は出来る」と書いています。そう、人が歩けば道は出来るのです。そして人の集団に権力者が登場すると、集団の秩序を維持して庶民に安全を保障する代償として、税(年貢)を納めさせるようになります。権力者の指定する場所まで、各方面からの道が通じます。税(年貢)を運ぶために欠かせない道です。古代、中世、近世と人口が増え、徳川時代(1600年頃～1867年)になると、江戸と地方を結ぶ街道も整備されるようになりました。東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道の五街道は良く知られています。参勤交代の諸大名の行列が行き交うのですから、広い道が砂利でしっかり踏み固められていました。しかし街道から外れた多くの地域の道は、荷車がやっと通れるくらいの細い道でした。

柿生地域の道もそんな道でした。今は世田谷町田線が通っていますが、昔の道は世田町線と、時に交差したり離れたりしながら、三軒茶屋から登戸の渡しを通過して鶴川に至り、そこからは世田町線とサヨナラして、相模原から橋本を抜け、津久井に至る道でした。そのため津久井道と呼ばれていたのです。



柿生周辺の津久井道

左の図をご覧ください。一番右端が百合ヶ丘方面です。小田急新線工事場の小の字の辺りが、本線と多摩線の分岐点になります。新百合ヶ丘駅は万福寺の上り坂を上りきる手前の辺りになります。昭和30年の新道は世田町線で、一部区間は当時の津久井道と重なっています。本来の津久井道は右端のところから弘法の松へ向かう上り坂1本でした。小田急線と世田町線に沿って進む道は、大正10年(1921年)に出来た

津久井道のバイパスです。柿生側から多摩川の渡しに向かうには、こちらの方が近いのですが、万福寺の坂道は水はけが悪く、いつも湿っていて荷車や重い荷を背負った人は、前に進めなくなってしまふ欠点がありました。そのため、荷車を引いた人や重い荷を背負った人は、遠回りでもこちらの方が安全で、時間も計算しやすいと、弘法の松の上り坂を通ったと言います。

柿生駅に近いふじや(藤屋)さんは、江戸時代からの豪商で、柿生駅東口のロータリー右手の2階建ての貸店舗が名残をとどめています。ほうとう様は今も大事にされ、新鮮なお花がいつも飾られていますね。そうなんです。駅前の商店街は古くからの津久井道なのです。ここから一度線路をまたぎ、新道の世田町線を越えて高台に上がり、また下って線路をまたいで、竹の花のちょっとした賑わいに出ます。ここが津久井方面から生糸や生繭を江戸へ運ぶ商人たちの溜り場として、一時栄えたところでした。白根耕地の西端、柿生陸橋から水処理センターにかけてが竹の花と呼ばれていました。この地は横浜が開港し、外国貿易が盛んになると商品の流れが江戸から横浜に変わってすたれてしまい、かつて栄えた面影は残っていないのです。

柿生郷土史料館 第96回カルチャーセミナー

ふるさと麻生の昔と今を思う

～川崎市制百年を期して～

2年前の1月、民俗学の手法を駆使して、好著『柿ふるさと』を上梓した「ふるさとを語る柿岡塾」の会長(塾頭)を務められた中山茂氏をお迎えして、川崎市と柿生地域の戦中・戦後の暮らしと社会の変化に関して、思うところを存分に語っていただきます。

米寿を迎えて、なお意気軒高と地域の進むべき方向について、思うところを発信し続け、さらに将来に残すべき地域の伝承を採録し続けておられる中山氏の語る場所は、間違いなく示唆に富むものとなるでしょう。皆様の参加をお待ちしています。

講師：中山 茂氏 (ふる里を語る柿岡塾会長)

日時：1月26日(日) 13時30分～15時30分

会場：柿生中学校 視聴覚室

参加費：無料。どなたでも参加できます。

柿生郷土史料館 開館日のご案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日 : 12月7・14・21日(土曜日) 1月12・19・26日(日曜日)

◎開館時間: 午前10時～午後3時